

ファシズム：そのドクトリンと制度
Fascism: Doctrine and Institutions (1935)

ベニート・ムッソリーニ、ジョヴァンニ・ジェンティーレ^{*1}
訳：山形浩生^{*2}

2015年8月19日

^{*1} 著作権消滅

^{*2} ©2015 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) 禁有断転載、有断複製。

目次

第1章 根本的な思想	1
第2章 政治社会的ドクトリン	5
補遺：注	13

第1章

根本的な思想

あらゆるしっかりした政治的着想と同様に、ファシズムも行動であり、思想である。その行動の中にはドクトリンが内在し、そのドクトリンはそれが挿入される歴史的な力の体系から生じるものであり、それに対して内部から働きかけるものでもある(1)。だからそれは、時空間の制約条件と相関した形を持つ。でもそれはまた、思想史における高次の真理表現となる理念内容も持っている(2)。他の人々の意志を支配する人間の意志として、世界で精神的な影響力を行使するためには、その行動が行使される対象となる、移ろいやすく個別的な現実と、そのうつろいやすいものが暮らしてその存在を宿している、永続的で普遍的な現実の両方を把握していなければ不可能だ。人々を知るには、人間を知らねばならない。そして人間を知るには現実とその法則を熟知せねばならない。国家の概念で、根本的には生命の概念でないものなどあり得ない。そうした概念は哲学または直観であったり、論理の枠組み内で発達する観念体系や、幻視または信仰の中で集約される観念体系であったりするが、いずれの場合でも常に、少なくとも潜在的にはこの世界の有機的な概念なのだ。

だからファシズムの実務的な表現の多く—たとえば党組織、教育制度、規律—は、生命に対するその全般的な態度との関係の中で考えた場合にしか理解できない。それは精神的な態度である(3)。ファシズムは世界の中に、人間が個人として自分だけで立ち、自己中心的で、本能的にその人物を利己的な瞬間的快樂の暮らしへと押しやる自然法則の僕として現れるような、作り物めいた物質的側面だけを見るのではない。ファシズムは、個人だけでなく民族と国を見る。道徳律により結ばれた個人と世代を見る。共通の伝統と使命により、短い快樂の周期で閉じた生活への本能を抑圧し、義務の上に築かれたもっと高次の生を造りあげ、個人が自己犠牲と利己性否定、さらに死そのものにより、時空間の制約から解放された命をつくりあげ、人間としての価値を創り出す純粋に精神的な存在を達成できるのである。

ファシズムの概念は、だから精神的なものとなる。それは19世紀の軟弱な物質主義的実証哲学に対する、今世紀の全般的な反動から生じるものだ。反実証主義的だが肯定的、懐疑主義的でもなければ不可知論でもない。悲観主義的でもなければ、一般的に生命の中心を人間の外に置く(あらゆる否定の)ドクトリンのような、怠惰な楽観論でもない。人は自由意志の行使により、自分自身の世界を創れるし、創らねばならないのだ。

ファシズムは人が活発であり、全精力を傾けて行動に取り組むことを望む。己にふりかかる困難を雄々しく認識しつつ、それに直面する用意があってほしい。ファシズムの考える人生とは闘争であり、それにより人は自らのために真に価値ある場所を勝ち取らねばな

らない。そのためにはまず、自分自身を（肉体的にも道徳的にも知的にも）それを勝ち取るのに必要な道具と化さねばならないのだ。個人にとってもそうだし、民族にとっても、人類にとってもこれが言える(4)。だからこそ、あらゆる形態の文化（芸術、宗教、科学）(5)には最高の価値が与えられ、教育には突出して重要なものとなる。まただからこそ、人間が自然を従属させて人間界（経済的、政治的、倫理的、知的）を創り出すための仕事に、本質的な価値が与えられるのだ。

この生の肯定的なとらえ方は、明らかに倫理的なものだ。それは現実のあらゆる領域のみならず、それを支配する人間活動も覆う。どんな行動も道徳的判断から逃れられはしない。どんな活動からも、道徳的な目的が万物に与える価値をはぎ取ることはできない。だからファシストの把握する生は、真剣であり厳粛で宗教的なものだ。生の表現のすべては、道徳的な力に支えられて精神的責任の下にある世界の中に吊り下がっている。ファシストは「安楽な」人生を軽蔑する。(6)

ファシストにとっての生の概念は宗教的なものだ(7)。そこでの人間は、高次の法則との内在的な関係で把握され、個人を超越する客観的な意志を与えられて、精神的社会的意識の一員へと高められるのだ。ファシスト体制の宗教政策に、日和見的な配慮以上のものを感知できない者たちは、ファシズムが政府システムであるばかりか、他にも何よりも思考体系だと言うのを認識できずにいる。

ファシストの歴史概念では人が人となるのは、家族の一員として、社会集団、民族、そしてあらゆる国民が貢献を持ち寄る歴史機能への貢献を行う、精神的なプロセスによるのみである。だからこそ、記録や言語、習慣、社会生活の規則に見られる伝統には大きな価値がおかれる(8)。歴史の外におかれたら人は存在し得ない。だからファシズムは、18世紀物質主義に基づくあらゆる個人主義的抽象に反対する。そしてまた、ジャコバン派的なユートピアやイノベーションすべてにも反対する。18世紀の経済主義的文献で考察されているような、この世の「幸せ」の可能性を信じたりはしないし、将来のいつの日か、人類がその困難すべてについて最終的な解決法を確保するという目的論的な概念も拒否する。この発想は、生命が絶え間なく流動し続け、進化の過程にあると教えてくれる経験に逆らうものだ。政治において、ファシズムは現実主義を目指す。実践において、ファシズムは歴史条件の自発的な産物であり、自分自身の解決方法を見つけるか示唆するような問題とだけ対処したがる。現実のプロセスに入り、その中で働く力を掌握することによってのみ、人間は他の人間や自然に対して力を行使できる(10)。

反個人主義であるファシストの生の概念は、国家の重要性を強調し、個人の利害が国の利害と一致する範囲でのみ個人を受け入れる。国家は良心と普遍的なものを代表し、歴史的存在としての人類意志を代表するのだ(11)。ファシズムは、古典的自由主義に反対する。それは絶対王政に対する反動として生じたものであり、国家が人民の意識と意志の表現になった時点で、その歴史的機能を終えたのだ。自由主義は個人の名の下に国家を否定した。ファシズムは、個人の真の本質を表現するものとしての国家の権利を再確立する(12)。そして自由が生きる人間の属性であり、個人主義的自由主義のでっちあげた抽象的な木偶の属性でないのであれば、ファシズムは自由を擁護する。それも持つ価値のある唯一の自由、つまり国家の自由であり、国家内部での個人の自由だ(13)。ファシスト的な国家概念はすべてを包含する。その外には、どんな人間的、精神的な価値も存在しえず、そもそも価値など持ち得ない。このように理解されたファシズムは全体主義的であり、ファシスト国家—あらゆる価値の合成物で有り、それを含むユニットでもある—は人々の生す

べてを解釈し、発展させ、力を与えるのだ (14)。

国家の外にはどんな個人も集団（政党、文化協会、経済連合、社会階級）もない (15)。だからファシズムは、国家（これは階級を単一の経済的倫理的な現実へと融合させる）内部の一体性を認めず、歴史を階級闘争以外のものとしては見ない社会主義に反対する。またファシズムは階級の武器としての労働組合主義にも反対である。だが国家の軌道の中に収まる限り、ファシズムは社会主義や労働組合主義の台頭をもたらした真のニーズを認識するし、国家の一体性の中でバラバラの利害が調整され調和化される、ギルド制度や協調組合制度の中で、しかるべき配慮をそれらに与えるのだ (16)。

いくつかの利害をもとにグループ化されることで、個人は階級を形成する。いくつかの経済活動によって組織化されると、個人は労働組合を形成する。だがまず何よりも、かれらは国家を形成する。これは単なる人数の問題ではなく、多数派を形成する個人の集合などではない。ファシズムはしたがって、国民をその多数派と同一視し、最大数の水準にまで引きずり下ろす形態の民主主義には反対である (17)。だがそれは、国民というものを量より質の観点から—本来そうあるべきなのだ—観念として捉えた場合には最も純粋な民主主義形態となる。その観念は最も倫理的で一貫性を持ち、真実であるがために最強であり、それが少数派、いやそれどころか一人の意識と意志として人々の中に表現され、果ては大衆の意識と意志の中に自らを表現し、民族的に自然と歴史的条件により国民として融合された集団全体に表現され、まったく同じ発展と精神的陣形の路線に沿って、一つの意識と一つの意志として進むようになるのだ (18)。人種でもなく、地理的に規定された地域でもなく、歴史的に永続化する人々。観念で統合され、生きる意志、力への意志、自意識と人格を与えられたマルチチュードだ (19)。

国家に体现される限り、この高次の人格は国民となる。国家を生み出すのは国民ではない。これは古びてしまった自然主義的な観念であり、国民政府を支持する 19 世紀的な宣伝の基盤となったものだ。むしろ国家のほうが国民を創り出し、自分たちの道徳的一体性に気がつかされた人々に対して意志力、つまりは真の生を与えるのだ。

国民的独立の権利は、いかなるものであれ、単なる事実通りの理念的な自意識形態から生まれたりはしない。まして、大なり小なり受動的で無意識の事実上の状況などから生まれるものではない。むしろ能動的で意識的な政治的意志が、行動で自らを表現し、己の権利を証明する用意を示すことで生じるのだ。つまりそれは、国家の存在、あるいは少なくともその萌芽により生じるのだ。実際、普遍的な倫理的意志の表現として国民独立の権利を創り出すのは、まさに国家なのだ (20)。

国家の中に表現された国民が、生きた倫理的存在であるのは、それが進歩的である限りにおいてだ。不活動は死である。だから国家は個人の意志に対して法的形態と精神的価値を与え、統治する権威というだけでなく、己の国境を越えてもその意志を感じさせ、尊敬される権力でもある。それにより、その発展を確保するための決断を持つ普遍的な性格の実践的な証明を与えるわけだ。これは組織と拡張を意味する。実際にやらなくてもその可能性はある。だから国家は人の意志と己を同一視する。その発展は障害物などでは抑えられず、自己表現を実現することで、自分自身の無限性を実証するのだ (21)。

人格の高次で強力な表現としてのファシスト国家は力だが、精神的な力だ。それは人間の道徳的、知的な生の表現をすべてまとめあげる。だからその機能は自由派のドクトリンが述べたような、単に秩序を強制して平和を保つだけに限られはしない。それは個人が人権と称するものを安穩と行使するような領域を定義する、単なる機械的な装置などではな

い。ファシスト国家は内側に向けては、受け入れられた行動の基準でありルールであり、全人格的な規律だ。それは知性に負けず劣らず意志に浸透する。それは文明社会の一員となった人間の中心的な動機となり、その人格の奥深くにまで沈み込む。それは行動の人と思索家の心にすみつき、芸術家と科学者の心に暮らす。それは魂の魂なのだ (22)。

つまりファシズムとは、ただの法律制定者でも制度創設者でもない。教育者であり精神的な生活のプロモーターなのだ。それは生の形のみならず、その内容までも作り替えようとする—人間、その人格、その運命を。この狙いを実現するため、ファシズムは規律を強制して権威を使い、魂に入り込んで圧倒的説得力で支配する。だからこそファシズムはそのエンブレムとしてリクトルの杖 (ファスケス) を選んだのだ。それは一体性と強さと正義のシンボルなのだから。

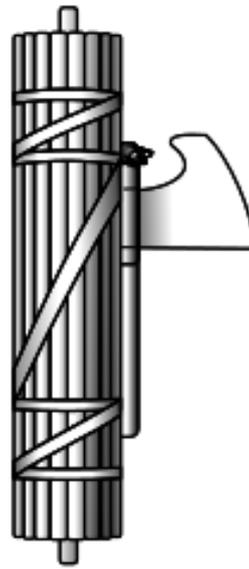


図 1.1 ファスケス (リクトルの杖/束) 出所: wikipedia

第2章

政治社会的ドクトリン

いまやずいぶん昔となった1919年3月、イタリアポポロ広場の列柱の間から演説した私は、かつて介入し、1915年1月のイタリア戦闘者ファッシ創設以来ずっと私に従ってくれた介入主義者残党をミラノに招聘したが、そのときには具体的なドクトリン計画は何も持っていなかった。私が実務経験を持っていた唯一のドクトリンは、1914年冬以来の社会主義のドクトリンだった。十年近くそれが続いたわけだ。私は追従者として、および指導者としての体験をしてきたが、それはドクトリン的な体験ではなかった。その期間の私のドクトリンは、行動のドクトリンだ。均一で普遍的に受け入れられた社会主義ドクトリンは、1905年にベルンシュタイン率いる修正主義運動がドイツで生じて以来、存在しなくなっていた。その修正主義に対して左翼革命運動傾向のシーソーゲームが形成され、その中でドイツは言葉の応酬をいつまでも止めようとはしなかったが、ロシア社会主義の場合、それはボリシェビズムへの前奏となったのだった。

改革主義、革命主義、中道主義、この用語の残響そのものがすでに死に絶えている。一方でファシズムの大いなる川を見れば、その源流として『ル・ムーヴモン・ソシャリスト』のソレル、ペギー、ラガルデレなどがあり、イタリア社会主義者の世界—それまではジョリッティの党と乳練りあって去勢され、麻酔を嗅がされていた—に新しい響きをもたらした、1904年から1914年のイタリアサンディカリストたちの世代にも起源がある。その新しい響きはオリヴェッティの『パグネ・リベレ(自由ページ)』誌、オラーノの『ルパ』、エンリコ・レオーネの『ディヴェニル・ソシアルス』誌に響いていたものだ。

戦争が1919年に終わったとき、社会主義はドクトリンとしてすでに死んでいた。それが存在し続けたのは単なる遺恨としてでしかなかった。特にイタリアでは、戦争を引き起こし、その責任を負うべき人々に対する復讐心をかきたてるしか社会主義に生き残りの道はなくなっていた。

『イル・ポポロ・ディターリア(イタリア人民)』紙は闘士と生産者の日々の機関であると副題に掲げていた。「生産者」という言葉はすでに精神的なトレンドの表現だった。ファシズムはそれまで机上で構想されてきたドクトリンの赤ん坊などではなかった。それは行動の必要性に生まれ、行動そのものだった。それは政党ではなく、最初の2年間は反政党であり運動だった。私とその組織に与えた名前が、その性質を確定した。

だがいまやくしゃくしゃに丸められた当時の紙面を読み返すだけの手間をかけ、イタリア戦闘者ファッシが創設された会合の記述を読み返すなら、そこに見られるはドクトリンではなく、指標、予測、ヒントなのだ。それは避けがたい付帯条件の網の目から解放されたときに、やがて数年後にはファシズムの名を掲げた一連のドクトリン的立場へと発展す

るものだ。そのファシズムは、過去や現在のあらゆるものと異なる政治ドクトリンとして位置づけられる。

当時私はこう述べた。「もしブルジョワジーが、我々をかれらの避雷針になると思っ
ているのであれば、それはお門違いだ。我々は人民の元に赴かねばならない(中略)我々は
労働階級に、経営陣の責任になじんでほしい。そうすれば、事業運営というのが決して容
易ではないことが認識できるだろう。(中略)我々は、技術、精神の両面での後衛主義と戦
う(中略)いまや政権引き継ぎの可能性が開かれた以上、怯えてはいけない。我々は突撃
すべきである。現政権が克服されるのであれば、それに取って代わるのは我々でなくては
ならない。継承の権利は我々にある。なぜなら我々はイタリアの参戦をうながし、それを
勝利へと導いたからだ(中略)既存の代表政治形態では我々は満足できない。我々はいく
つかの利害については直接参加を求める(中略)このプログラムはギルド(corporazioni)
への逆行を意味するという反対があるかもしれない。それがどうした!だから私はこの
会議が、国民サンディカリズムの提出した経済的主張を受け入れてくれると願う(後略)」

このサン・セポルクロ広場での最初の日から、「ギルド(corporazione)」という言葉
が発せられたというのは何とも奇遇ではないか。この言葉は、革命が展開するにつれて、
ファシスト政権の基本的な立法的、社会的な創造物の一つを表現するようになったのだ
から。

ローマへの行進に先立つ年月には、行動の必要性のために遅れや入念なドクトリン的熟
考が許されない時期もあった。町や村で戦いが展開されていた。議論はあったが……ずっ
と貴くかつ重要なものがあつたのだ……死だ。ファシストは死に方を知っている。ドクト
リン—十分に書き込まれ、章や節に分けられて注もついたようなものは欠けていたかもし
れないが、それははるかに決定的なものに置き換わっていた—信念だ。それであっても、
書籍、記事、会議で可決される決議、大小各種演説などの助けでだれかが当時の記憶を蘇
らせたのであれば、その者が探し方や取捨選択方法を知っているのであれば、戦闘がい
まだに戦われている間にもドクトリン的な基礎が敷かれていたことを発見するであろう。
実際、ファシスト思想が武装し、自らを洗練させ、その組織化を進めたのはこの日々のこ
となのだ。個人と国家の問題。権威と自由との問題。政治、社会、そして特に民族問題が
論じられた。自由主義、民主主義、社会主義、フリーメーソンのドクトリンや、イタリア
人民党のドクトリンとの対立が、懲罰的遠征と同時に行われていた。それでも、正式な体
系の欠如は不誠実な敵によって、ファシズムはドクトリンを編み出すことなどできないと
宣言するための材料として使われていた。だがまさにその瞬間に、そのドクトリンは—き
わめて荒々しい形ではあれ—形成されつつあつた。まずは、あらゆる新しい思想がそう
であるように、暴力的で断定的な否定の形を採って。その後は建設的な理論というもっと肯
定的な姿をとって。そしてさらに1926年、1927年、1928年には、その政権の法や制度
に組み込まれることで。

ファシズムはいまや、体制としてだけでなく、ドクトリンとしても明確に定義されてい
る。これはつまりファシズムが、その批判能力を自分自身や他のものに対して行使するこ
とで、世界中の国民たちにかくも深い不安を引き起こしている、物質的知的な関心事項に
影響するあらゆる問題を、その独特の立場から検討し、独自の基準により判断を下して、
いまや独自の政策によりそれらに対処する用意が調つたということである。

まず、目下の政治的検討すべてを完全に離れ、人類の将来発展について考えよう。ファ
シズムは一般的に、永続平和の可能性を信じないしそれが有益だとも思わない。したがっ

てファシズムは、平和主義を自己犠牲に対する臆病で怠惰な否定の隠れ蓑として捨て去る。戦争だけが、あらゆる人間エネルギーを最大の緊張状態に引き上げ、それに直面するだけの勇気を持つ人々に、高貴さの紋章を与えるのだ。その他あらゆる試験は戦争の代替品でしかなく、生か死かの選択において人を自分自身と向き合わせるものには決してならない。従って、あらゆる犠牲を払っても平和を主張するドクトリンは、ファシズムとは相容れない。同じくファシズムの精神と異質なものとしては、特別な政治的状况に対応するための方便として受け入れられることはあっても、あらゆる国際主義的、あるいは連盟的な上部構造がある。こうしたものは歴史が示す通り、国民たちの心が感情的、理想主義的、実務的な考慮により深く揺らげば、こなごなに砕け散ってしまうのだ。ファシズムはこの反平和主義的な態度を個人の生に持ち込む。「まったく気にしないぜ (me ne frego)」—負傷兵が包帯に殴り書いた、戦闘部隊の誇り高いモットーは、哲学的なストイシズムの行動であるだけでなく、単に政治的にとどまらないドクトリンを総括したものだ。それはあらゆるリスクを受け入れる、戦争精神の証拠なのだ。これはイタリアの生における新しいスタイルを示している。ファシストは生を受け入れ、それを愛する。自殺は臆病なこととして拒絶し軽蔑する。ファシストの理解する生とは、義務、高揚、征服のことである。生は後期で十全なものでなければならない。それえは自分自身のために生きるものだが、なによりも近く遠くや現在未来を問わず、他人のために生きるものなのだ。

政権の人口政策はこうした前提の結果である。ファシストは隣人を愛するが、隣人という言葉は、何やら曖昧模糊とした概念を指すものではない。隣人を愛するとは、必要となる教育的な厳しさを排除するものではない。まして、差別化と身分を排除するものなどではない。ファシズムはみんなして抱き合うようなものとは無縁だ。各種国民たちの中であって、ファシズムは他の人民をまっすぐ見据える。油断せず警戒を怠らない。他の人々の発言や行動を追い、その利害の変化をすべて記録する。そして変わりやすい偽りの装いなどに騙されるのを許さない。

こうした生の概念により、ファシズムは科学的社会主義だのマルクス主義社会主義だのと称する代物の根底にあるドクトリンを、決然と否定する。それは史的唯物論のドクトリンであり、人類史を階級闘争と、生産過程や道具の変化で説明し、それ以外のすべてを排除しゆおうとするものだ。

経済生活の浮沈—原材料の発見、新しい技術プロセスや科学発明—がそれなりの重要性を持つ事はだれも否定しない。だが、それが人類史のすべての説明に十分でありその他の要因すべてを排除できるというのはバカげている。ファシズムは今も将来も、聖なるものとヒロイズムを信じている。つまり経済的動機—目先のものであれ遠くのものであれ—がまったく作用していない行動を信じている。人を歴史の表層の人形にすぎないものとして見て、真の駆動力が動き作用する深みとは関係なく、波の合間に表れたり消えたりするだけの存在と考える史的唯物論を否定したファシズムは、歴史のこうした経済概念の自然な結果である、階級闘争が避けがたく修復不能だという性質を否定する。何よりもファシズムは、階級闘争が社会変化の主要なエージェントだということを否定する。こうして社会主義ドクトリンの主要論点二つを打破したので、もはや社会主義に残されているのは、慎ましい民衆の苦しみと悲しみが軽減される社会関係に向けた、人類史と同じくらい昔からある感情的な待望だけだ。だがここでもファシズムは、幸福というのが社会主義的に、ある経済発展段階において、万人が最大の物質的快樂を補償されることで、ほぼ自動的に確保されるものだという経済的解釈を否定する。ファシズムは、可能性としての唯物論的

幸福概念を否定し、それを18世紀半ばの経済学者たちのもとに放棄するのだ。これはつまり、ファシズムは「福祉(よい生活) = 幸福」という等式を否定するということだ。この等式は人類を、食べて肥え太れたら満足するという単なる動物としか見ておらず、したがって人間を単純明快な植物的存在へと貶めてしまうのだ。

社会主義に続いて、ファシズムは各種民主主義的イデオロギーを相手に腕ならしをして、それらの前提と実用的な応用や実施物をどちらも否定する。ファシズムは人数が、それ自体として人間社会の決定要因と成り得ることを否定する。人数が定期的に相談を受けて統治するという権利を否定する。ファシズムは、人間のどうしようもない肥沃かつ有益な不平等性を主張し、それが普通選挙などの機械的かつ外在的な装置によって平等化などできないと主張する。民主体制は、人々がときどきだまされて、自分たちが独立主権を行使しているという妄想に陥る体制と呼べるかもしれない。でも実は本当の独立主権は、だれか別の人が一貫して保有して行使しているのであり、その別の人はときに無責任な秘密勢力だったりするのだ。民主主義は王のない体制であり、そこには多数の王が住み着いて、その王たちはときに一人の王が専制君主であった場合に比べてすら、ずっと排外的で、圧政的で、破壊的であることもある。これではなぜファシズムが一付随的な理由から1922年までは共和制傾向を維持していたとはいえ—その立場をローマ行進に先立って捨て去ったかがわかるだろう。なぜならファシズムは、政府の形態など最早最重要事項ではないと考えたのだ、そして過去や現在の王政や、過去や現在の共和国を研究してみると、王政も共和制も永続名ものとは判断できず、それぞれがある国の政治的進化、歴史、伝統、心理を表現した統治形態を示しているのだ、ということがわかる。

ファシズムは、王政 VS 共和制というジレンマを克服した。このジレンマをめぐるのは、民主体制があまりに長く耽溺しすぎ、すべての不十分な面を王政のせいにして、後者こそは完璧な体制であると主張してきた。だが経験からわかるのは、一部の共和制は本質的な反動的で絶対体制だが、一部の王政は最も大胆な政治的社会的実験をも受け入れるという事だ。

ルナン—彼はファシストを先取りする直観を持っていた—はその哲学的省察の一つでこう述べている。「理性と科学は人類の産物だが、人々のための理性を直接人々を通じて求めるのは荒唐無稽である。理性が存在するためには、万人が理性に馴染みを持つというのは本質的ではない。そして万人が理性に触れねばならないとしても、それは民主主義を通じては実現できない。民主主義は、文化の厳しい形態をすべて滅亡させ、あらゆる高次の学習形態の破壊につながる宿命にあるらしいのだ。社会はそれを構成する個人のよい生活と自由のためだけに存在するという格言は、自然の計画と一貫性を持つようには見えない。自然は種全体だけを気にかけており、個体など平気で犠牲にするようなのだから。このような理解をされた民主主義(そしてあわてて付け加えておくと、他の解釈もあり得る)は、墮落した大衆が粗野で卑しい快楽を享受する以上の考えをまったく抱かない社会形態になるのではないかという恐れはきわめて大きい」

民主主義を拒絶するにあたり、ファシズムは政治的平等性というバカげた伝統的なウソ、集合的無責任の習慣、幸運と無限の進歩という神話を拒絶する。

でも、もし民主主義というのが大衆が国家の周縁部に追い戻されないような政治体制という意味で理解されるのであれば、このページの著者はすでにファシズムを、組織化され、中央集権化された権威主義的な民主主義であると定義している。

ファシズムは政治の領域でも経済の領域でも、まちがいに絶対的に自由主義ドクトリ

ンには反対である。19世紀における自由主義の重要性は、今日の論争のためにあまり誇張してはならないし、その19世紀に花開いた各種のドクトリンのうちのたった一つでしかないものを、現在やこの先永遠にわたる人類にとっての宗教にしてしまってはならない。自由主義が本当に花開いたのはたった15年だ。それは1830年に、神聖同盟がヨーロッパ全体を1798年以前にまで後退させようとしたことに対する反応として生じた。頂点に達したのは1848年にピウス九世までが自由主義者になったときだった。その年の直後から衰退が始まった。1848年が光と詩の都市だったなら、1849年は闇と悲劇の年だった。ローマ共和国は同じ共和国であるフランスに殺された。その同じ年、マルクスがその有名な『共産党宣言』で社会主義の福音を開始した。

1851年にナポレオン三世が非自由主義的クーデターを行い、1870年までフランスを支配したが、その年に史上最も厳しい軍事敗北の一つに続き、民衆蜂起により追放された。勝利したのはビスマルクであり、かれは自由主義だのその予言者たちの去来だのについて、知りもしなかった。19世紀を通じ、自由主義という宗教が、ドイツ人ほど高度に文明化された人々にまったく知られていなかったというのは、実に象徴的なことだ。その唯一の例外は、たった一期しか続かなかった「バカげたフランクフルト国民議会」と言われる挿話だ。ドイツは自由主義の外で、自由主義に反対しつつ国民統一を実現した。このドクトリンは、基本的には王政的であるドイツ人の気性にはまったく異質だ。これに対し、自由主義は無政府主義の歴史的、論理的な先触れでしかない。ドイツ統一実現に向けての三段階は、1864年、1866年、1870年の三度の戦争であり、それを率いたのはモルトケやビスマルクのような「自由派」だった。そしてイタリア統一の構築にあたっては、自由主義はマツィーニやガリバルディなどの非自由主義者の貢献に比べると、実に卑小な役割しか果たさなかった。非自由主義者であるナポレオン三世の介入がなければ、我々はロンバルディを得ることはなく、非自由主義者であるビスマルクがサドワとセダンで介入しなければ、かなりの確率で我々は1866年にヴェネチアを掌握することもなく、1870年にローマ入城も果たせなかつただろう。1870年から1915年までの年月は、自由主義という新たな教義の高等司祭たちの意見においてすら、彼らの宗教のどん底であり、文学では頹廃主義に攻撃され、実務ではアクティビズムに攻撃されたのである。アクティビズムとはつまり、ナショナリズム、未来主義、ファシズムだ。

自由の世紀は、無数のゴルディアスの結び目を山積みにした挙げ句、それを世界大戦という剣で断ち切ろうとした。これほど残酷な犠牲を強いた宗教はいまだかつてない。自由主義の神々は血に飢えていたのだろうか？

いまや自由主義は神殿への門を閉ざそうとしている。それが経済の分野で主張した不可知論や、政治と道徳の分野で証明してみせた無関心主義が、過去と同じように将来においても世界を荒廃に導くと感じて、人々はそれを放棄しつつあるのだ。

だからこそ、今日の政治的実験がすべて反自由主義である理由がわかる。そしてこのためにも、自由主義を歴史の領域から外に持ち出そうとし、まるで歴史が自由主義とその大家たちのために取り置かれた保護地であるかのように振る舞い、自由主義こそは文明の最終的な結論でだれもその先には行けないように振る舞うのは、極度にバカげている。

でも社会主義、民主主義、自由主義のファシストによる否定は、世界を1789年以前に湿られていた立ち位置へと差し戻したいという願望を意味するものと解釈してはならない。1789年というのは、通常は民主自由の世紀を開いたとされる年だ。歴史は逆行したりはしない。ファシストのドクトリンは、ド・メストールを予言者として崇めたりはしな

い。絶対君主制は過去のものであり、教会崇拜も同様だ。封建制の特権だの、社会を閉鎖的で交流のないカーストへと区分したりだのといったものは、すでに死に絶え終わっている。ファシストが持つ権威概念は、警察国家の権威とは何一つ共通性がない。

国民を「全体主義的」に統治する政党というのは、歴史上の新しい展開だ。先例もないし、比較できる事例もない。自由主義、社会主義、民主主義のドクトリンの瓦礫の下から、ファシズムはいまだに重要な要素を引き出す。歴史の「獲得された事実」とでも言うべきものを保存する。それ以外のすべてを否定する。つまり、あらゆる時代のあらゆる人々に当てはまるドクトリンという発想を否定する。19世紀は社会主義、自由主義、民主主義の世紀だったかも知れないが、だからといって20世紀もまた社会主義、自由主義、民主主義の世紀であるべきということにはならない。政治ドクトリンは変転する。国民はとどまる。我々は、この世紀が権威の世紀であり、「右」に傾く世紀であり、ファシストの世紀だと信じてまったく構わないのだ。19世紀が個人の世紀だったなら（自由主義は個人主義を前提とする）今世紀は「集合的」世紀だと信じて構わないし、つまりは国家の世紀だと信じて構わない。新しいドクトリンが、他のドクトリンでまだ重要な要素を活用するのはまったくもって論理的なことだ。どんなドクトリンも、まっさらで真新しくだれも聞いたことがまったくないような形では生まれてこない。どんなドクトリンも、まったくのオリジナリティを主張したりはできない。最低でも歴史的な意味で、それに先立つドクトリンや、それに続くドクトリンとは常につながっているのだ。だからマルクスの科学的社会主義は、フーリエの類やオーウェンの類やサンシモンの類の空想社会主義とつながっている。だから19世紀の自由主義は、その起源を18世紀の啓蒙運動にさかのぼれるし、民主主義のドクトリンは、百科全書派のドクトリンにさかのぼれる。あらゆるドクトリンは、人々の活動を決めた目的に向けて導こうと狙う。だがそうした活動は逆に、そのドクトリンに反作用をもたらし、それを新しいニーズのために改変調整し、あるいはそれをはぎ取るかもしれない。だからドクトリンは重要な行動であるべきで、口だけの看板であってはならない。そこからファシズムの現実主義的な流れ、その生きる意志、暴力に向ける態度やその価値観が生じるのだ。

ファシストのドクトリンにおける要石は、その国家概念だ。国家の本質、その機能、その狙い。ファシズムにとって国家は絶対的な存在であり、個人や集団は相対的だ。個人や集団は国家の内部に置かれる限りにおいて容認される。自由主義国家は、共同体を導いたり、その物質的・道徳的進歩を先導したりせず、単に結果を記録するだけだ。ファシスト国家は目を見開いており、独自の意志を持つ。だからこそそれは「倫理的」と呼べるのだ。

1929年におけるファシスト体制5周年大会において、私はこう語った。「ファシスト国家は夜警国家ではない。市民の個人的な安全だけを気にかけるような存在ではないのだ。また、ある水準の物質的反映と比較的平和な暮らしの条件を保証するだけのために組織されるものでもない。そんなことなら会社の経営陣でもできる。またそれは、実務的な現実から切り離され、市民と国民の多面的な活動から己を遠ざけたような、純粹に政治的な存在でもない。国家は、ファシズムが把握して実現する形においては、国民の政治的、法的、経済的まとまりを確保するための精神的・倫理的な存在であり、その起源と成長が精神の表現であるような組織なのである。国家は国の内的・外的安全を保証するが、それはまた長い年月を通じて言語や習俗や信念の中に描き出された、人々の精神を保護して送信する。国家は現在にとどまらず、過去でもあり、そして何よりも未来なのだ。個人の短い生の期間を超越した国家は、国民に内在する意識を代表する。その意識の表現形態は変わっても、表

現したいというニーズは残る。国家は市民に公共心を教え、その使命を認識させ、統一へとつながす。その正義は市民たちの多様な関心を調和させる。そして未来世代に対し、科学、芸術、法律、人間の連帯における精神の征服物を送信する。それは人々を、原始的な部族生活から、人間の力の最高のあらわれである帝国支配へと導くのだ。

国家は未来世代に、その安全性を確保したり、法律を遵守したりするために命を投げ出した人々の記憶を伝える。未来の時代のために、領土を拡張した船長たちの名前や、イタリアの名前を有名にした天才たちをお手本とし、その記録を作る。国家に対する敬意が衰え、個人や集団の分裂しがちで飛び散りがちな傾向が支配的になったら、その国民は衰退に向かっていく。1929年以來、至るところでの経済政治的な展開はこれらの真実を強調してきた。国家の重要性は急成長している。危機と称するものは、国家の行動によってのみ鎮められ、国家の軌道の中においてのみ收拾される。自由主義の初期の日々に「国家は己自身を無力にして、辞表を手渡す準備を整えるべきである」と宣言したジュール・シモンは、いまや影も形もないではないか？あるいは前世紀後半に、国家があまり統治するのを控えるべきだとうながしたマカロックの類はどこへいった？そして産業が政府に求めるのは放置してくれることだけだと考えた、あのイギリスのベンサムはどうだろう。あるいは最高の政府は怠け者の政府だと述べたドイツのフンボルトは？いまや事業に政府が介入しると絶え間なく、不可避かつ火急に要求されているのを見て、彼らは何と言うだろうか？経済学者たちの第2世代は、この点で第1世代よりも非妥協的ではなかったというのは事実だ。そしてアダム・スミスですら一きわめて慎重にとはいえ—事業への政府介入についてええドアを閉じずに残しておいたのだ。

自由主義が個人主義のことなら、ファシズムは政府のことだ。

でもファシスト国家は、独特で独自の創造物だ。反動的ではなく革命的である。というのもそれは、他のところで生じた一部の普遍的な問題を解決せんとするからだ。その問題は、政治分野における政党分裂、議会による権力篡奪、集会の無責任さなどだ。あるいは経済分野では、労働組合や業界団体の紛争や対立によりますます大量に生じてくる重要な機能で、資本と労働の双方に影響するものなどだ。そして倫理の分野では、秩序、規律、愛国心の道徳的な指示への従属などに対して求められるニーズなどだ。

ファシズムは国家に対し、広範な国民の支持を基盤として強く有機的であることを求める。ファシスト国家は経済分野でも、他の分野と同様に支配するつもりである。協調組合、社会、教育制度を通じて、また国民のあらゆる政治経済精神的な力を、それぞれの協会を通じて組織化することで全国に循環させ、国中至るところでその活動が感じられるようにする。国家の権威を認識し、その活動を感じ、国家目標に奉仕する用意のある何百万人も個人のに基づく国家は、中世君主の圧政国家ではない。1789年以前または以後に存在する専制国家とは何一つ共通点を持たないのだ。

個人を押し潰すどころか、ファシスト国家は個人のエネルギーを何倍にも増やす。ちょうど連隊において兵士は仲間の兵士の数により矮小化されるどころか、何倍の存在にもなるようなものだ。ファシスト国家は国民を組織するが、個人に十分な余裕を残す。役立たずな、あるいは有害な自由は制限し、本質的な自由は温存した。こうした点について、その当の個人は判断を下せない。判断できるのは国家だけだ。

ファシスト国家は宗教現象一般に無関心ではないし、ローマカトリックに対して無関心な態度を保ったりはしない。それはイタリア人にとって特別で肯定的な宗教だからだ。国家は神学を持たないが道徳コードを持つ。ファシスト国家は、宗教に最も深い精神的な表

現を見る。そしてこのために、宗教を尊重するだけでなく、擁護し保護する。ファシスト国家は、国民公会の革命的謔妄状態の頂点におけるロベスピエールのように、独自の「神」を設置しようとはしない。あるいはポリシェヴィズムのように、神を人間の魂から消し去ろうなどという無駄な試みはしない。

ファシズムは修道士、聖人、英雄たちの神を尊重し、人々の純真で原始的な心が感じ取る神、彼らが祈りを捧げる神を尊重する。

ファシスト国家は、権力を行使し命令を下す意志を表現する。ここではローマの伝統が強さの概念として体现されている。ファシストのドクトリンが理解する帝国権力は、領土的なものや軍事的、商業的なものに限られない。それは精神的であり倫理的でもある。帝国国民、つまり直接間接的に他の国民の指導者である国民は、1平方マイルの領土すら征服する必要を感じずに存在できる。ファシズムは帝国主義的精神—つまり国民の拡張傾向—にかれらの活力の表現を見る。その逆の傾向、つまり自国に関心が制限されているというのは、頹廢の症状だと見る。立ち上がり、再び多対上がる人々は帝国主義的だ。放棄は死にゆく人々の特性なのだ。ファシストのドクトリンは、イタリア人のように、何世紀にもわたり外国に従属した状態で雌伏していたが、いまや世界の中で己を再確立しつつある人々の傾向や勘定にもっともうまく適合しているものなのだ。

でも帝国主義は規律、努力の協調、深い義務感と自己犠牲の精神を意味する。これがファシスト体制の実務活動の多くの側面を説明してくれるし、国家の力の多くが採っている方向性も説明してくれる。また、19世紀の陳腐なイデオロギーを持ち出して20世紀イタリアの自発的で不可避な動きに反対する者たちに対し確実に向けられるであろう熾烈さも、これで説明できる。そうした古いイデオロギーは、政治社会変革における偉大な実験が敢えて実施されているところでは、常に否定されるイデオロギーなのだ。

現在ほど人々が権威、方向性、秩序を渴望したことはない。もし各時代が独自のドクトリンを持つなら、無数の症状が示しているのは、我々が時代のドクトリンはファシストのものだということだ。それがきわめて重要だということは、それが信念を鼓舞したという事実で示される。そしてこの信念が魂を征服したということは、ファシズムがいまやその倒れた英雄たちや殉教者を名指しできるということを示される。

ファシズムはいまや、世界の至るところにおいて、自己表現を達成したことにより人類思想史におけるある瞬間を代表するに至ったあらゆるドクトリンが持つ、かの普遍性を獲得したのである。

補遺：注

1. 哲学的概念

- (1) ファシズムが死にたくないなら、あるいはもっとひどいこととして自殺したくないなら、いまこそ自らのドクトリンを提示しなくてはならない。だがそれは、永遠に我々にまわりつくネツソスのロープとはならないし、またそうなってはいけない。というのも明日というのは謎めいて未だに見えないものだからだ。このドクトリンは、日常生活の政治的個人的行動を導く規範となる。

このドクトリンを口述した私は、我々の法律やプログラム、ファシズムの理論的実務的ガイドは改訂され、訂正され、拡大、発展されるべきものだということをまっ先に認める。というのもすでにそれは、時の手による手傷という苦しみを味わっているからだ。私はドクトリンの本質と根本的な部分は、イタリアのファシズムの新人たちに対する武装蜂起のよびかけとして2年間使われてきた主張の中に今でも見つかると思っている。でもその第一の根本的想定を出発点として使いつつ、我々はプログラムを広大な分野に広げねばならない。イタリアのファシストたちは一丸となって全員がこの作業に力を合わせねばならない。これはファシズムにとってきわめて重要な作業だ。二回の敵対的な運動の間に、協定の有無を問わず平和的な共存が実現されてきた地域に所属するものはなおさらこれが当てはまる。

これから私が使うことばは大きなものだが、私はこれから国民会合招集までの二ヶ月の間に、ファシズムの哲学が創り出せればと本気で願っている。ミラノはすでに、初のファシストプロパガンダ学校に貢献している。これは単に、あるプログラムのための材料を集め、ファシスト運動から不可避免的に台頭するべき党の憲章の確固たる基盤としてそれを使うというだけの話ではない。それはまた、ファシズムは暴力的な男性の寄せ集めでしかないというバカげたおとぎ話を否定するという課題でもある。実際問題としてファシストの中には、落ち着かないが思索的な階級に属する男性もたくさんいるのだ。

ファシスト活動が採る新しい方向性は、ファシズムに典型的な闘争心をいささかも減らすものではない。ドクトリンや教義を心に与えても、武装解除ということにはならない。むしろそれは、行動の力を強化し、自分の作業について一層意識的にしようとするものだ。自分たちの大義を十分員知って戦う兵士は、最高の闘士となる。ファシズムはマツィーニの二重の装置を採り入れる。思考と行動だ。(ミケレ・ピアンキへの手紙、1921年8月27日執筆、ミラノのファシスト文化宣伝学校開校に際して、*Messaggi e Proclami*, Milano, Libreria d'Italia, 1929, P. 39).

ファシストは、お互いに接触するように配備しなくてはならない。その活動はドクトリンに基づく活動でなくてはならず、精神と思考の活動でなくてはならない。

(中略)

我々の敵対者が会合にきていたら、ファシズムが単なる行動ではなく、思考でもあるのだと納得したことだろう。(ファシスト党国民評議会での演説、1924年8月8日、*La Nuova Politica dell'Italia*, Milano, Alpes, 1928, p. 267 所収)。

- (2) 今日私は、思想、ドクトリン、現前としてのファシズムが普遍的であると主張する。それは個別制度においてはイタリア的だがその精神においては普遍的なんだ。そしてそれ以外ではあり得ない。その精神が普遍的だというのはその性質のためだ。だからだれでも、ファシストヨーロッパを予想できる。ファシズムのドクトリンと実践から、自分自身の制度のインスピレーションを得ることで、ヨーロッパは、言い換えれば、現代国家を襲う問題解決にあたりファシストに機会を与えるのだ。現代国家、20世紀の国家は、1789年以前に存在した国家や、その直後にできた国家とは大きく異なる。今日のファシズムは普遍的な要件を満たしている。ファシズムは国家と個人、国家とアソシエーション、アソシエーションと組織化されたアソシエーションとの関係という三重の問題を解決するのだ。(一周年メッセージ、1930年10月27日、*Discorsi del 1930*, Milano, Alpes, 1931, p. 211 所収)。

2. 精神化された概念

- (3) この政治プロセスには、哲学プロセスが伴う。一世紀にわたり物質が神棚に置かれていたというのが事実なら、今日ではその場を占めるのは精神だ。民主主義精神に特有の表現すべては、その結果として否定される。気楽さ、即興、個人的責任欠如、多数の横暴、「人民」と呼ばれるあの謎めいた神様などだ。宗教にはじまるあらゆる精神の創造物が前面に出てきて、数十年にわたり西洋社会の民主主義では大人気だった反教会主義など、もはや誰も維持できなくなる。神が戻りつつあると言うとき、それは精神的な価値が復活しているという意味なのだ。(“Da che parte va it mondo”, *Tempi della Rivoluzione Fascista*, Milano, Alpes, 1930, p. 34)。

生の至高の極限を研究するよりも、それについての瞑想に任されるべき領域がある。結果として科学は経験から出発するが、どうしようもなく哲学へと突入し、私の意見では、哲学だけが科学を啓蒙して普遍的観念へとつなげられるのだ。(ボローニャの科学大会にて、1926年10月31日、*Discorsidel 1926*. Milano, Alpes, 1927, p. 268 所収)。

ファシスト運動を理解するためにはまず、その根底にある精神的現象を、その広がりや深みすべてにわたり享受せねばならない。この運動の表現は強力で決然とした性質のものだが、人はもっと先に進むべきだ。それを示す事実として、イタリアのファシズムは国家の権威衰退を容認して、国の進歩を止めてしまいかねなかった弱く無能な政府に対する政治的反抗だけでなく、宗教、信念、国の聖なる原理を墮落させた古い観念に対する精神的な反抗でもあった。だからファシズムは、人民の反抗なのだ。(イギリス人民へのメッセージ; 1924年1月5日、*Messaggi e Proclami*, Milano, Libreria d' Italia, 1929, p. 107 所収)。

3. 闘争としての生の実証概念

- (4) 闘争は万物の起源にある。というも生はコントラストだらけだからだ。愛と憎しみが、白と黒があり、昼と夜があり、善と悪がある。そしてこうしたコントラストがバランスを実現するまで、闘争はまちがいに人間性の根底にとどまり続けるのだ。でもそれはよいことなのだ。今日、我々は戦争や経済紛争、思想闘争などに耽溺できるが、闘争がもはや存在しない日がやってきたら、その日は憂鬱で満たされることだろう。それは破滅の日であり、終末の日だ。でもそんな日は決してこない。なぜなら歴史は常に新しい地平をあらわにするからだ。平穩、平和、静けさを回復しようとする中で、人は現時点の力学の傾向に刃向かっていることになる。人は他の闘争と他の意外な結果を覚悟すべきだ。平和は人々が、普遍的な兄弟愛というキリスト教の夢に降伏したときにしか来ない。彼らが海や山を越えて手を握らなければだめだ。個人的には、私はこうした理想主義を大して信じてはいないが、別に排除もしない。私は何も排除しないからだ。(トリエステのポリテアマ・ロセッティ劇場にて、1920年9月20日、*Discorsi Politici*, Milano, Stab. Tipografico del «Popolo d' Italia», 1921, p. 107 所収)。
- (5) 私にとって、国民の名誉はその者が個別に人間文明に対して行った貢献によるのです。(E. ルドウィグ『ムッソリーニとの対話』ロンドン Allen and Unwin, 1932, p. 199)

4. 倫理概念

- (6) 私はその組織をイタリア戦闘者ファッシと呼んだ。この硬く金属的な名前は、私が夢見た通りのファシズムのプログラムすべてを構成している。同志諸君、これがいまでも我々のプログラムなのだ。つまり戦うことだ。ファシストの生は絶え間なく連続的な戦いであり、それを我々は楽々と引き受け、大いなる勇気と、必要とされる勇敢さをもって取り組む。(ファッシ創設七周年記念日に、1926年3月28日、*Discorsi del 1926*, Milano, Alpes, 7, p.98)
- あなたはファシスト哲学の核心に触れました。最近、フィンランドの哲学者が私に、ファシズムの意義を一文で述べるよう求めたので、私はドイツ語でこう書きました。「我々は『楽な生活』に反対する」！(E. ルドウィグ『ムッソリーニとの対話』ロンドン Allen and Unwin, 1932, p. 190)。

5. 宗教概念

- (7) ファシズムが教義でないなら、どうしてその追隨者たちを勇気と禁欲主義で満たせるだろうか。それができるのは、宗教の高みにまで飛翔した教義だけなのだ。たとえば、残念ながらいまや他界したフェデリコ・フローリオの唇から発せられたような言葉などだ。(“Legami di Sangue”, *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 256)。

6. 歴史的、現実的概念

(8) ある民衆の最大の精神的力の一つは、まちががなく伝統だ。それが継続的で絶え間ない魂の創造である限りは。 (“Breve Preludio,” *Tempi della Rivoluzione Fascista*, Milano, Alpes, 1930, p. 13)

(9) 我々の気性は、問題のイデオロギー的または神秘的昇華を評価するよりは、その具体的な側面を検討するよう仕向ける。だから我々は易々とバランスを取り戻す。 (“Aspetti del Dramma,” *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 86).

我々の戦いはだれにも感謝されないが、それでも自分たちの軍のみに頼るよう強制するために、それは美しい戦いなのだ。明らかになった真実を我々はちりぢりに引き裂き、ドグマを唾棄し、あらゆる天国の理論を拒絶して、ペテン師どもの顔色が白赤黒に変わるほど狼狽させる。人類に「降伏」を与えるという奇跡の薬を売るペテン師どもだ。我々は計画も、聖人も使徒も信じないし、何より幸福も救世も約束の地も信じないのだから。 (*Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 223).

我々はたった一つの解決策を信じない。それが経済的、政治的、道徳的だろうと生の問題に対する線形の解決策を信じない。なぜなら各種聖具室からの華々しい聖歌隊のおかげで、生は線形ではないし、決して原初のニーズでたどれる一部分に還元できはしないからだ。 (“Navigare necesse,” *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 233).

(10) 我々は顔を同じ地平に永遠に向けたままの不動のミイラなどではないし、またそうなりたいたいと思わない。また我々は、宗教のふりをしたもののお祈りのような公式が機械的につぶやかれる、破滅的な偏狭主義の狭い茂みの中に閉じこもりたいたいと思わない。我々は人間、生きた人間であり、自分なりの貢献を、いかに慎ましいものであっても、歴史の創造に捧げたいのだ。 (“Audacia,” *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p.233)

我々は社会主義が無視するか軽蔑する道徳や伝統的価値を保持する。でも何よりも、ファシズムは謎めいた将来に対する恣意的な借り入れを意味するもの全てに対して嫌悪を抱く。 (“Dopo due anni,” *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 242).

右も左も主張する、保存と刷新の理論や、伝統と進歩の理論にもかかわらず、我々は救済の最後の板きれとして過去に必死でしがみついたりしない。その一方で我々は、未来の魅惑的な霧の中へ頭から飛び込んだりもしない。 (“Breve preludio,” *Diuturna*, Milano, Alpes, 1930, p. 14)

否定、永遠の不動性は、呪いということです。私は全面的に動きを支持する。私は、更新し続ける者なのです。 (E. ルドウィグ『ムッソリーニとの対話』ロンドン, Allen and Unwin, 1932, p. 203).

7. 個人と自由

(11) 我々は、民主自由個人主義に面と向かって、個人は国家の中にある限りでしか存在せず、したがって国家の要求事項に従属するのであり、文明はますます複雑となる側

面を想定しており、個人の自由はますます制約されるのだ、と主張した初めての集団である。(ファシズム一般職員会議に向けて、*Discorsi del 1929*, Milano, Alpes, 1930, p. 280)

国家の感覚は、イタリア人の意識の中で成長する。というのも、彼らは国家だけが自分たちの統一と独立の替えがたい安全策なのだと感じるからだ。国家だけが自分たちの種族とその歴史を未来へとつなげてくれると感じるのだ。(七周年記念日メッセージ、1929年10月25日 *Discorsi del 1929*, Milano, Alpes, 1930, p. 300)

過去8年の間にこれほど驚異的な成功を収めたなら、今後50年から80年にかけて、イタリアのこの先のトレンド、この実に強力で、実に活力汁に満ちていると感じられるイタリアが、真に壮大になると仮定し予測できると思うだろう。特にこれは、市民の間に調和が維持され、国家が社会政治紛争の唯一の仲裁者となり、すべてが国家の内側にとどまり何も国家の外にでなければそうなるだろう。というのも、家が砂漠の真ん中で孤立している野蛮人でもない限り、国家の外で生きる個人など想像不可能だからだ。(上院での演説、1928年5月12日、*Discorsi del 1928*, Milano, Alpes, 1929, p. 109).

ファシズムは国家に対し、その絶対的な理倫理的意味を主張し、階級と分類の独善に反対することで、独立主権機能を回復させた。選挙集会の単なる道具と化していた国家の政府に対し、国家の人格と帝国としての力を代表するものとして尊厳を取り戻させた。ファシズムは、国家行政を派閥と党派利害の重みから救い出した。(国家評議会への演説、1928年12月22日 *Discorsi del 1928*, Milano, Alpes, 1929 p.328).

- (12) だれ1人、ファシズムの道徳的性質を否定しようなどと思っはいけない。というのも私は、自分が国家の道徳的、精神的な力を代表していると感じなければ、この演台から語るのを恥ずかしく思ってしまうから。国家に独自の精神がなく、独自の道徳がなければ、国家はどうなってしまうだろうか。その道徳こそが、法に力を与え、その力によって、市民は国家に服従するのだから。

ファシスト国家は倫理的性質を主張する。それはカソリックだが、何よりもしれはファシストである。実はそれはひたすら本質的にファシストなのだ。カソリシズムはファシズムを補い完成させ、これを我々は公然と宣言するが、形而上学や哲学の装いで我々に刃向かえるなどとだれも思っはいけない。(議員評議会での演説、1929年5月13日 *Discorsi del 1929*, Milano, Alpes, 1930, p. 182).

己の使命を完全に認識し、ばく進する人々を代表する国家。人々を必然的に、その肉体的な側面ですら変えてしまう国家。単なる行政者以上のものとなるには、国家は偉大な言葉を発し、偉大なアイデアを語り、その人々の前に大きな問題を投げかけねばなりません。(*Discorsi del 1929*, Milano, Alpes, 1930, p. 183).

- (13) 自由の概念は絶対的ではない。というのも生で絶対的なものなどないからだ。自由は権利ではなく責務だ。それは贈り物ではなく征服物なのだ。それは平等性ではなく特権なのだ。自由の概念は時の経過と共に変わる。平和時の自由は戦時の自由とはちがう。繁栄時の自由は、貧困時に許される自由ではない。(イタリア戦闘者ファッシ創設五周年記念日、1924年3月24日 *La nuova politica dell'Italia*, vol. III, Milano, Alpes, 1925, p. 30).

私たちの国家では、個人は自由を奪われてなどいません。それどころか、孤立し

た人間より大きな自由を持っています。というのも国家がその人を守り、その人は国家の一部なのであります。孤立した人間は無防備です。(E. ルドウィグ『ムッソリーニとの対話』ロンドン, Allen and Unwin, 1932, p. 129).

- (14) 今日、我々は世界に対して、アルプスからシチリアまで広がる強力な統一イタリア国家の創設を発表してもよいだろう。この国家はよく組織され、中央集権化された一元的な民主主義で表現され、人々は自由に往き来できるのだ。紳士諸君、実際、人々を国家の要塞に招き入れれば人々はそれを守ろうとするが、かれらを閉め出せば人々はそれを攻撃するのだ。(下院での演説、1927年5月26日 *Discorsi del 1927*, Milano, Alpes, 1928, p. 159).

ファシスト体制では階級の一元制、政治、社会、道徳的な一元制は国家の中で実現されており、それもファシスト国家の中でだけなのだ。(下院での演説、1928年12月9日, *Discorsi del 1928*, Milano, Alpes, 1929, p. 333).

8. 協調組合国家の概念

- (15) 私たちは統一イタリア国家を創り出した—ローマ帝国以来、イタリアは統一国家だったことがないのを思い出そう！ここで私は、国家のドクトリンを荘厳に再確認したい。ここで私は、ミラノのスカラ座で私が打ち出した公式を、当時に劣らぬエネルギーを持って再確認したい—すべてを国家の中に、何も国家に逆らわず、何も国家の外にはない。(下院での演説、1927年5月26日 *Discorsi del 1927*, Milano, Alpes, 1928, p. 157).

- (16) 言い換えると我々は、自然の中で作用する力をコントロールする国家なのだ。我々は政治的な力をコントロールし、道徳力も、経済力もコントロールする。したがって我々は全面的な協調組合国家なのだ。我々は世界の中の新しい原理を代表し、民主主義、金権政治、フリーメーソン主義、いまだに1789年に敷かれた根本原理に従う世界に対する、ひたすら全面的で決定的なアンチテーゼなのだ。(党の新民 Directory に対する演説、1926年4月7日, *Discorsi del 1926*, Milano, Alpes, 1927, p. 120).

協調組合省は官僚機関ではないし、必然的に独立したものとなるシンジケート組織の機能を行使するつもりもない。彼らはシンジケートの成員を組織、選択、改善しようとする。協調組合省は、その中心と外部において統合された協調組合が実現された事実となるための制度だからだ。そこでは、経済世界の力と利害のバランスが達成される。こうしたバランスは、国家の領域においてしか可能性はない。というのも国家だけが集団や個人の対立する利害を、調整してもっと高い狙いを実現するという観点から超越できるからだ。協調組合国家により認知、保護、支援されたあらゆる経済組織は、ファシズムの軌道内に存在するという事実により、こうした狙いの達成は加速される。言い換えると、かれらはファシズムの概念を理論でも実践でも受け入れるのだ。(協調組合省開設時の演説、1926年7月31日, *Discorsi del 1926*, Milano, Alpes, 1927, p. 250).

我々は協調組合とファシスト国家を構築し、国民社会の国家、あらゆる社会階級の利益を集約、コントロール、調和、なだめる国家を造りあげ、そこであらゆる階

級は等しい形で保護される。これに対し民主自由体制では、労働は国家をおずおずと見上げ、実のところ国家の外にあり国家に刃向かう存在で、毎日毎時間の敵が国家だと考えていた。でも今日のイタリアでは、協調組合やフェデレーションに入ろうとしないイタリア人労働者は一人もいない。偉大で巨大な生きる組織の生きた原子となりたがらない者はいない。その組織こそが、ファシズムの国民協調組合国家なのだ。(ローマ行進 4 周年記念日演説、1926 年 10 月 28 日 *Discorsi del 1926*, Milano, Alpes, 1927, p. 340).

9. 民主主義

- (17) 戦争は革命的だった。つまり、流された血により民主主義の世紀、人数の世紀、多数派と量の世紀が消え去ったからだ。(“Da che parte va il Mondo,” *Tempi della Rivoluzione Fascista*, Milano, Alpes, 1930, p. 37)
- (18) Cf. note 13.
- (19) 人種：それは気分であって現実ではありません。95% が気分です。(E. ルドウィグ 『ムツソリーニとの対話』 ロンドン, Allen and Unwin, 1932, p. 75).

10. 国家の概念

- (20) 国民はそれが人民である限りにおいて存在する。人民は、それが無数にいて頑張ってはたらき、よく統制されている限りにおいて存在する。権力はこの三層構造原理の結果である。(党全体集会にて、1929 年 3 月 10 日, *Discorsi del 1929*, Milano, Alpes, 1930, p. 24).

ファシズムは国家を否定しない。ファシズムは市民社会が、国民だろうと帝国だろうと、国家という形以外では実現できないと主張する。(“Stab, anti-Slato, Fascismo,” *Tempi della Rivoluzione Fascista*, Milano, Alpes, 1930, p. 94).

我々にとって国は主に精神であり領土だけではない。莫大な領土を持ちながら人類史に何ら痕跡を残さなかった国家もある。それは人数の問題でもない。というのも歴史上、小さくほとんど見えないような国家もあったが、それが不死の消えない記録を芸術や哲学に残している。国民の偉大さは、こうした美德と条件の複合体なのだ。国民が偉大なのは、精神の力が現実に翻訳された場合である。(ナポリでの演説、1922 年 10 月 24 日 *Discorsi della Rivoluzione*, Milano, Alpes, 1928, p. 103).

我々は独立主権国家の中で国民を一元化したい。国家は万人の上であり、万人に対立することだってできる。なぜならそれは、国民の歴史上の道徳的連続性を代表しているからだ。国家がなければ国民はない。それは単なる人間の寄せ集めでしかなくなり、歴史がかれらにふりかける、各種の分裂の力に曝されることになる。(ファシスト党国民評議会での演説、1924 年 8 月 8 日 *La Nuova Politica dell'Italia*, vol. III; Milano, Alpes, 1928, p. 269).

11. 動的な現実

- (21) 人々が生きたいなら、権力への意志を発達さえるべきだと思う。さもないと彼らは植物化し、惨めに暮らし、強い人々に食べ物にされる。強い人々には、この権力への意志が高めの水準まで発達しているのだ。(上院への演説、1926年8月28日)。
- (22) イタリア人の性格を作り直し、魂の不純物を取り除き、あらゆる犠牲に対して我々を強化し、イタリア人の顔に強さと美の真の性質を回復させたのは、ファシズムなのだ。(ピサでの演説、1926年5月25日, *Discorsi del 1926*, Milano, Alpes, 1927, p. 193)。

ファシスト徴兵の内在的性質と深遠な重要性を描き出すのも場違いではない。それは単なる儀式ではなく、教育におけるきわめて重要な段階であり、イタリア人男性の不可欠な準備過程であって、ファシスト革命はこれを国家の基本的な責務の一つと考える。まさに根本的だ。というのも国家がこの責務を果たさなかったり、あるいはそれをそもそも検討しなかったりすれば、国家は単にあっさりその存在権を放棄したに等しいからだ。(下院での演説、1928年5月28日 *Discorsi del 1928*, Milano, Alpes, 1929, p. 68)